



Sponsored by:
Dell Technologies

Authors:
Susan G. Middleton
Matthew Marden

April 2020

Dell Technologies On Demand の ビジネス価値：ストレージの従量課金制 コンサンプションモデルに関する調査

エグゼクティブサマリー

IDCは、従量課金制ソリューションであるDell Technologies On Demand (DTOD) を利用している企業、特にFlex On DemandとData Center Utilityを利用中の企業に対して、当該企業がDTODを活用することで得たコスト、俊敏性およびビジネス成果への影響を明らかにするためにインタビューを実施した。これらの調査対象企業は、デル テクノロジーズのストレージソリューションを使ったフレキシブルコンサンプションモデルへ移行したことで、自社の環境のサイジングとストレージ容量利用の最適化を実現でき、ストレージコストを全体的に抑えられたと認識している。さらに、これらの企業は、新しいストレージ機能にこれまでよりも容易かつ高速でアクセスできるようになったため、俊敏性が向上し、新しいビジネス機会への迅速な対応も可能となった。

インタビューを受けた企業は特に、Dell Technologies On Demandへ移行したことで、効率、生産性、収益面で大きく向上すると共に、明確なコスト削減も実現できたと述べている。具体的には以下の通りである。

- **23% 削減**：年間の平均ストレージ運用コスト
- **64% 削減**：計画外停止で発生するコスト（生産性低下と収益損失の削減による）
- **25% 削減**：ストレージ取得コスト
- **20% 増加**：利用可能なストレージ容量
- **92% 短縮**：新しいストレージ容量の導入時間
- **54% 減少**：計画外停止の発生件数
- **3万6,400ドル増** ユーザー100人当たりの業務の成果
(収益増とユーザー生産性向上の結果)

概況

世界中の企業が、自社ビジネスを差別化し優位に立つため、テクノロジーを使ってITインフラストラクチャ、運用、プロセスの進化を押し進め、さらなるデータ主導化とデジタル化に向けてまい進している。こうした企業は、プライベートクラウド、パブリッククラウド、エッジロケーションのような複数の運用環境で実行される多様な重要なビジネスアプリケーションやワークロードに対応できるパフォーマンスとセキュリティをすべて備えた創造的なテクノロジーソリューションを求めている。また、企業は、非効率性を払拭し、自社の戦略目標の達成を目指す重要な取り組みに集中するために、時間、資金、リソースを解放する方法を見つける必要がある。

これは、重要であるが達成困難な目標である。ビジネスとITのリーダーの多くは、予算とリソースに制約があり、日常的なメンテナンスタスクから新しいイノベーションにリソースを容易には振り向けられないと述べている。端的に言えば、主要なマイルストーンを達成するための資金とテクノロジーの専門知識を持っていない。

今日、多くのコンサンプションベースのソリューションが用意されており、テクノロジーとサービスのコストを資本支出 (CAPEX) から継続的な運用支出 (OPEX) にシフトできる。これらのフレキシブルペイメントソリューションは、インフラストラクチャの運用コストと複雑さを減らし、安定した性能評価を維持し、ビジネス変革を加速できる。これらの利点のすべては、オンプレミスのインフラストラクチャを含む新しいコンサンプションモデルの迅速な採用につながっている。このオンプレミスのインフラストラクチャについては、パフォーマンス、サービスレベル、コンプライアンスの面で明確な利点も存在するため、利用継続に重点を置く企業もある。

フレキシブルコンサンプションモデルへの移行に伴い、各プロバイダーは、モデルの導入を容易にする価格設定、容量、サービスに関して分かりやすい指標を使い、モデルの採用を容易に進められるようにしている。IDCの調査結果から、顧客は柔軟なストレージ容量、簡素化されたストレージ管理、透明性の高い価格設定、堅牢なサービスを提供するモデルを求めていることが分かっている。2019年の調査では、フレキシブルコンサンプションモデルの採用を推進する具体的な要因に関して、顧客に質問を行っている。顧客の挙げた推進要因のうち上位のものを以下に示す。

- ハードウェア、ソフトウェア、サービスおよびサポートを改善、向上させる。
- アプリケーションのコストをインフラストラクチャに見合ったものとする。
- ストレージ容量コストを削減させる。
- ビジネス成果を向上、改善させる。
- ワークロードをスケーラブルなインフラストラクチャへ移行する。
- 予算を運用支出 (OPEX) として消化することで資本支出を抑制する。

Dell Technologies On Demandは柔軟性の高い支払いソリューションであり、インフラストラクチャ運用のコストと複雑さを減らし、安定した性能評価を維持し、ビジネス変革を加速させる。

- ITに関わる日常業務を自動化し、負担を減らす。

最近、デル テクノロジーズは、これらの推進要因に対応する戦略的イニシアティブを発表し、エッジ、コア、クラウドをカバーするすべてのインフラストラクチャポートフォリオに渡るコンサンプションベースのas-a-Serviceソリューションを拡充したポートフォリオを提供している。

DELL TECHNOLOGIES ON DEMAND

Dell Technologies On Demandは、コンサンプションベースのaaS (as-a-Service) ソリューションを幅広く揃えたポートフォリオであり、オンプレミスのインフラストラクチャとサービスを、今日のオンデマンドエコノミーで利用する形態に適したポートフォリオである。

さまざまなフレキシブルペイメントソリューションと付加価値サービスで、幅広いアプリケーションとワークロード向けに設計された統合型フルスタックソリューションを提供している。各ソリューションはすべて、デル テクノロジーズが持つ多様なITインフラストラクチャテクノロジーをベースとしている。Dell Technologies On Demandでは企業は、テクノロジーの利用形態やIT支出の予算化に関して、複数のオプションから選択できる。また、ワークロードのスケールングに関して、高い柔軟性と予測可能性を持っており、厳密な仕様を満たすことができる。

さまざまなコンサンプションモデルの中で、従量制コンサンプションモデルのオプションである Flex On DemandとData Center Utilityの2つが特徴的である。

Flex On Demandでは、サーバー、ストレージ、コンバージド/ハイパーコンバージドインフラストラクチャ、データ保護を含むデル テクノロジーズのすべてのインフラストラクチャソリューションポートフォリオをカバーするテクノロジーソリューションに対応した従量課金制コンサンプションモデルを提供している。このオプションは、基本容量 (committed capacity) と従量容量 (buffer capacity) の合計である総容量で構成されている。基本容量に関しては、毎月、合意されたレートで支払いがなされる。この基本容量を超える容量が必要になると、従量容量が開始され、所定の月に使用される従量容量の平均量に基づいて支払いが調整される。このアプローチでは、顧客は、必要に応じて従量容量の範囲内で、弾力的にスケールアップしたりスケールダウンしたりできる。

Data Center Utilityは、ITエコシステム内やエコシステム全体をカバーするビジネス要件に対応できるよう、高い柔軟性を持ち、カスタマイズに対応する。顧客は、必要に応じてスケールアップ、スケールダウンでき、必要に応じた容量を利用できるため、調達、請求、レポートが合理化され自動化される。さらに、一元化された窓口としてデリバリーマネージャーが割り当てられる。多くの場合、マネージドサービスは、総合的なas-a-Serviceソリューションの一部として最も利用される。

Flex On DemandとData Center Utilityの違いは、顧客の厳しい仕様を満足させるために各ソリューションがカスタマイズされる機会と規模にある。

以下の属性は、この2つのモデル間に共通な属性である。

- 導入されたすべてのストレージ容量に対して予測可能なレートを確立できる。
- 従量容量の価格設定を競争力のあるものにできる。
- バッファ容量は使われた場合のみ請求される（使われなければ課金されない）。
- 弾力性のある容量で、必要に応じてスケールアップ、スケールダウンできる。
- 契約期間の終了時に複数のオプションが提示される。顧客は、月単位の契約への移行、契約期間の延長、機器の返却などを選択できる。

Dell Technologies On Demandプログラムは、その能力から考えて、Flexible Consumption 3.0で要求される条件を満たしていると、IDCはみている。この条件には、ブランディングの一貫性の維持、製品を販売しやすく使いやすくすること、ライフサイクルサービスの提供などがあり、これらすべてを透明な価格設定で行っている。Dell Technologies On Demandのフレキシブルコンサンプションソリューションは、これらの重要な基準を満たしていると、IDCはみている。この従量課金制モデルでは、顧客は、資本支出を削減し、使用量に応じて支払う運用支出へシフトするための柔軟性と選択肢が得られる。さらに、デルテクノロジーには市場へのリーチを広げるために、2,000社以上のパートナーが存在しており、それらのパートナーは、顧客が重要な市場においてさらなる俊敏性と競争力を持てるように、すでにこのモデルを利用している。デルテクノロジーは投資を続け、広範なポートフォリオをカバーするさまざまなフレキシブルコンサンプションソリューションを1つの統合されたプログラムに再構成している。このプログラムによって、同社は急速な拡張を続ける市場の需要に対応し、テクノロジーインフラストラクチャソリューションを大規模に提供できる。

ストレージ向け Dell Technologies On Demandソリューションのビジネス価値

調査対象企業の特徴

IDCは、ストレージ向け Dell Technologies On Demand ソリューションの利用に関して、9社にインタビューした。このインタビューは定量的および定性的な両面から構成されており、デルテクノロジーの従量制フレキシブルコンサンプションの導入による各社のコスト、運用、ビジネスへの影響を把握できるように設計されている。

インタビュー対象であるデルテクノロジーの顧客は比較的大規模であり、平均すると従業員数が1万3,756人、年間売上規模が172億5,000万ドル、中央値で見ると従業員数が2,100人、売上規模が3億5,000万ドルであった。インタビューを受けた企業は、北米およびEMEA（欧州、中東およびアフリカ）に拠

点を置く企業であり、さまざまな業種を代表している。最も多い業種は、通信／メディア(4社)と専門的サービス(3社)であるが、医療(1社)と製造業(1社)も含まれる。Table 1にこれらのインタビューを受けた企業の詳細をまとめている。

TABLE 1 インタビューを受けた企業の企業特性

	平均値	中央値
従業員数	13,756	2,100
ITスタッフ数	1,441	60
ビジネスアプリケーションの数	747	38
年間収益	172億5,000万ドル	3.億5,000万ドル
国	カナダ(3)、米国(3)、英国、オーストラリア、ニュージーランド	
業種	通信／メディア(4)、専門的サービス(3)、医療、製造業	

Source: IDC, 2020

Dell Technologies On Demand ソリューションの選択と利用

インタビューを受けた企業は、デル テクノロジーのITインフラストラクチャリソース向けのフレキシブルコンサンプションモデルへの移行を選択した理由についてさまざまに述べている。しかしその基本的な要素に関して、すべての調査対象企業が、自社の企業運営とIT運用には、ビジネス要件とコストを密接に整合させ、ビジネスチャンスを創り出し、それに取り組める柔軟性を提供するアプローチが必要である、と結論付けていた。インタビューを受けた企業は、Dell Technologies On Demandは、テクノロジー、ストレージ容量の提供手段、コンサンプションベースのソリューションの設計という観点から見て、確実な価値を提案しており、それを利用することでITリソースを確保するために資本支出ベースのモデルから決別できたと述べている。インタビューを受けた企業は、デル テクノロジーのフレキシブルコンサンプションモデルを使い、ITインフラストラクチャ容量を導入する判断を行った基準として以下を挙げている。

- **使用に合わせた支出：**「Dell Technologies Flex On Demandの一番の利点は、ストレージに必要な支出を進行中のプロジェクトの数に、いつでも合わせることができることです。デル テクノロジーは、このタイプのオンプレミスオンデマンドモデルを提供している唯一のベンダーでした」

- **真の従量課金制モデル：**「Dell Technologies Flex On Demandを選定したのは、それが真の従量制モデルであるためです。他の複数のベンダーも検討しましたが、それらはリース以上のものではないと結論付けました」
- **クラウド的なインフラストラクチャの提供：**「私たちは、オンプレミス環境をよりクラウド仕様に近づける方法を検討し、これをFlex On Demandモデルを通じて推進しようとしています」

調査対象企業は、自社のストレージ環境向けにデル テクノロジーのフレキシブルコンサンプションモデルを主に使用していると述べたが、インタビュー対象にはハイパーコンバージドシステムとデータ保護機能を採用している企業も2社含まれていた。Table 2には、これらの企業がデル テクノロジーのソリューションを使って、いかに大規模なストレージリソースを利用しているかを示している。この表から分かるように、平均で8台のストレージアレイとほぼ9PBのストレージ容量を利用している。全体として、デル テクノロジーのフレキシブルコンサンプションモデルによって得られたストレージは、インタビュー対象企業のストレージ環境のほぼ半分を占めており、強力なストレージパフォーマンスと柔軟性を必要とするビジネスアクティビティにおけるストレージとして主要な役割を果たしていた。

- **メディア／通信業界**の4社では、重要であるが変化の激しいストレージ要件と時間に敏感なビジネス要求に直面していた。
- **プロフェッショナルサービス**のプロバイダー3社では、大きく変動するクライアントの要求に対応するため、最高品質のサービスを提供すると共に、高性能ストレージインフラストラクチャに依存する必要があるがあった。
- **製造業者**では、クラウドに極めて近い使い方の下で業務全体にストレージを提供できるオンプレミスストレージソリューションを必要としていた。
- **医療機関**では、最新かつ最高のパフォーマンスのストレージ容量を継続的に提供するための費用対効果の高い方法を求めている。

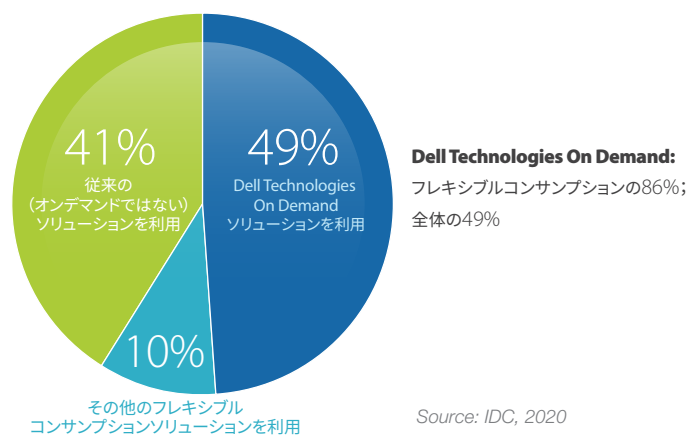
TABLE 2 インタビューを受けた企業におけるDell Technologies On Demandの利用状況

	平均値	中央値
ストレージアレイ数	8	1
容量 (TB)	8,929	1,685
ストレージ環境全体に占める比率	49%	50%

Source: IDC, 2020

インタビューを受けた企業は、自社のビジネスを続ける上で必要なストレージ容量を確保するために、オンデマンドプロビジョニングとDTODの双方を大いに利用している。Figure 1に示されるように、これらの企業のストレージのほぼ60%はオンデマンドデリバリーモデルに依存しており、その大半(86%)はデルテクノロジーズのモデルである。全体的に見て、調査対象企業において、DTODソリューションを利用してしているストレージ容量は、各社の全体の半分未満(49%)である。

FIGURE 1 インタビューを受けた企業のストレージ容量に占める Dell Technologies On Demandの割合 (%)



ビジネス価値と定量的なベネフィット

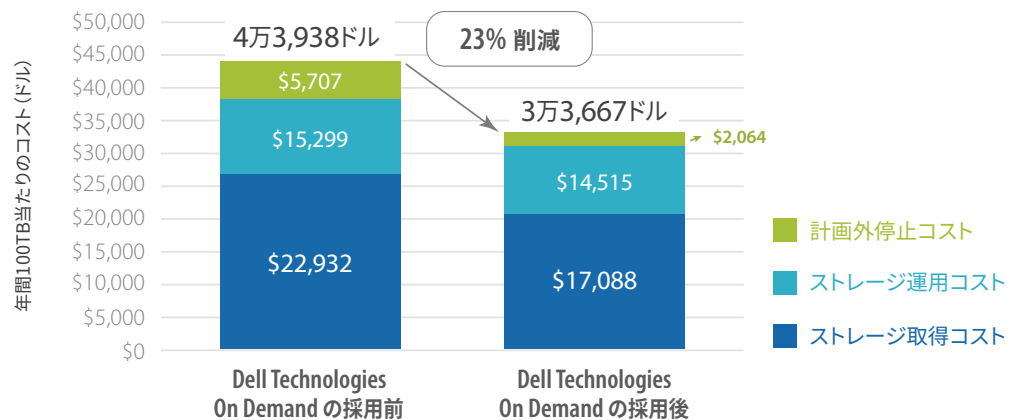
インタビューを受けた企業は、デル テクノロジーズのフレキシブルコンサンプションサービスを利用することで、ストレージリソースの使用を最適化し、必要とされる俊敏性を高めることができるため、コストを大幅に削減できると述べている。この利点によって、インタビューを受けた企業はコスト削減とビジネス上のベネフィットを確実に享受できる。IDCが計算したところ、インタビューを受けた企業は、自社のストレージ環境の運用コストを平均で23%削減しているにもかかわらず、収益と従業員の生産性が増加するというベネフィットを得ている。調査に参加した企業は、デル テクノロジーズのフレキシブルコンサンプションモデルが自社のコストとビジネス能力にどのように影響したかについて、次のような具体例を挙げている。

- **コストを使用に結び付け、ビジネス判断に活用する能力:** 「デル テクノロジーズのFlex On Demandの利点は、予備のストレージ容量があり、これを必要に応じて使用し、その使用分のみを支払えば済むということです。この予備容量を使う価値があるかどうかのビジネス判断を柔軟に行うことができます」

- **はるかに少ないコストで最新のテクノロジーを利用できる：**「運用コストの視点から、価格が最大の利点であることは明白です。いまのところ欠点はありません。最新のテクノロジーを購入した場合にかかるコストの何分の一かを支払うだけで、実質的にそれを手にしています」

俊敏性と拡張性の向上によってビジネスを維持しながら同時にコストを最適化するというテーマは、デルテクノロジーズの顧客とのインタビューで確認することができた。Figure 2は、デルテクノロジーズのフレキシブルコンサンプションモデルを使用したことで、インタビューを受けた企業がストレージ環境をいかに少ないコスト(平均で23%)で購入、使用、サポートできたかを示している。ストレージハードウェアのコスト、ストレージ運用コストおよびストレージに関連した計画外停止に起因するユーザー生産性と収益の喪失コスト(Figure 2を参照)という点に関して、年間100TB当たり1万ドル以上(企業当たり90万ドル以上)の節約があったことが示されている。

FIGURE 2 平均ストレージ運用コスト



ストレージ運用コストの削減

調査対象企業は、デルテクノロジーズのソリューションを利用することでストレージ容量の購入コストを最適化できたと報告している。データ環境の規模とストレージ要件を考えると、インタビュー対象企業は、パフォーマンスや柔軟性を犠牲にすることなく、ストレージのコスト効率を高める方法を見つけるというビジネス上の課題に直面している。これらの企業では、ストレージ購入のこれまでの手段、つまり資本支出(CAPEX)としてストレージを購入することに関連して、ストレージ容量とコストを最適化することを課題として挙げている。

- **オーバプロビジョニング(過剰配備)：**従来のストレージモデルでは、企業は予測される需要に対応するために過剰にプロビジョニングすることが多く、長時間アイドル状態となるか、まったく使用されない場合もある。

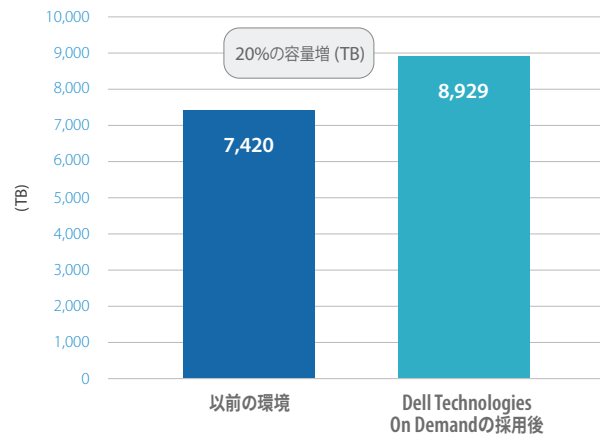
- **非効率的な使用：**企業がタイムリーに簡単にストレージ容量を追加できない場合、ビジネスの需要を満たすための企業全体の俊敏性が鈍り、必要に応じてストレージリソースをリダイレクトする能力は、リソースの利用パターンに影響を与え、非効率さを生み出す。
- **実際のコストに対する可視性の欠如：**企業が、アプリケーションのオーナーに正確なストレージコストを割り当てられない場合、オーナーはアプリケーションやサービスのニーズに合わせて容量のスケールダウンやスケールアップがしにくくなる。
- **運用支出モデルへの移行：**フレキシブルコンサンプションモデルを使い、企業は、大きな先行資本投資コストを避けることができる。OPEX駆動型のストレージモデルによって、全体コストは変わらないとしても、限られた予算をより柔軟に利用できる。

調査に参加した企業は、デルテクノロジーズのフレキシブルコンサンプションモデルをどのように活用してストレージリソースを費用対効果が高い状態で維持し、資産の効率的な利用ができるように自社の環境を適切なサイズにするかに関して、次のように語っている。

- **予測可能なコストと要求に合わせたサイジング：**「Dell TechnologiesのFlex On Demandのベネフィットは、コストが予測可能であることに尽きます。これによって、ストレージコストの予算がさらに上手く組めるようになりました。また、Flex On Demandの構造をプランニングし、これからの5年間、必要なものが提供されるようにサイジングを行いました。当社は、ついにストレージをユーティリティに変えることができました」
- **オーバープロビジョニングの回避：**「Flex On Demandを使い、ストレージリソースの過剰プロビジョニングを避けることが可能になりました。これまでの機器は設備投資コストで購入されてきたため、過剰なプロビジョニングを避けることはできなかったでしょう」
- **クライアントの要求を満足させながらコストモデルとして運用：**「現時点で、当社のクライアントは、我々がパブリッククラウドを利用することを認めていないため、オンプレミスインフラストラクチャを使い続ける必要があります。Flex On Demandモデルでは運用支出モデルが可能のため、一度に数百万ドルをすべて支払うことはなく、これは会社のキャッシュフローに貢献します」
- **変化するビジネスのデマンドを満足させる柔軟性を持ったコストの整合：**「当社におけるFlex On Demandの利用方法は、さらにコストの調整に深く関連しています。この意味は、Flex On Demandによって、コストを柔軟に増減できるという意味です。ストレージ容量を段階的に増やす必要がある場合でも、一度に全必要量を購入する必要はありません」
- **アプリケーション運用コストの可視性、コストに関してアプリケーションのオーナーと話し合いができること：**「我々にとって、Flex On Demandは公正なコスト透明性へのジャーニーの一部です。つまり、オーナーのアプリケーションと作業のコストの内容に関して、はるかに良い見通しが得られるように試みています。こうすることでオーナーのビジネスアプリケーションに関して、オーナーと会話ができるというベネフィットが得られます。このような会話とコストの中身の理解に基づいて、オーナーが移行を望んだ場合、我々はそれに応じることができます」

Figure 3は、調査に参加した企業が、デルテクノロジーズの従量課金制ソリューションを用いることで、効率を確保すると同時にリソースのオーバプロビジョニング（過剰配備）を避け、その結果、事業活動をサポートする上でいかに効果的にストレージを提供することができたかを示している。これらの企業は、コストを増やすことなく企業当たりほぼ 1.5 PB のストレージ容量を追加し、効率的なストレージ環境を平均で約20%増加させることができた（あるインタビューを受けた企業は 2.5 PB までストレージ容量を増加させた）と報告している。

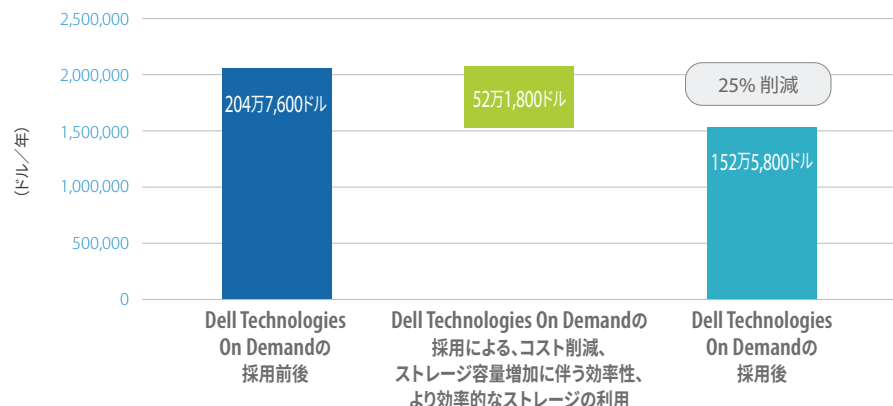
FIGURE 3 企業当たりの利用可能なストレージ容量



Source: IDC, 2020

Figure 4は、インタビューを受けた企業が、同じワークロードを実行するストレージ容量を購入するために、デルテクノロジーズのフレキシブルコンサンプションモデルを利用することで得られたコスト面での利点を示している。調査に参加した企業はオーバプロビジョニングを回避し、利用可能なストレージ容量をさらに効率的に使うことで、ストレージ購入費用を25%削減できた。この結果、達成されたコストの削減は、一企業当たり年間50万ドル以上である。調査に参加した企業にとっては、これは変化し、成長し続けるビジネス需要をコスト効率良くサポートする自社の能力に大きな進歩があったことを示している。

FIGURE 4 同一ワークロードに要するストレージコスト



Source: IDC, 2020

ストレージの運用効率

インタビューを受けた企業は、デル テクノロジーズのフレキシブルコンサンプションモデルへの移行によって、自社のストレージ環境に関連する継続的な支出を減らすことができたとも述べている。この運用コストには、スタッフが管理に費やした時間と電気料金や施設設備などの費用が含まれている。

調査対象企業では、デル テクノロジーズのソリューションを使い、これらの運用コストを全体として平均で5%削減し、さらに自社のビジネスを支えるストレージの調達と運用に関する全体コストの削減に貢献している。インタビューを受けた企業の数社は、フレキシブルコンサンプションモデルを使ったストレージへのアクセスの容易さによって、自社のストレージインフラストラクチャとサポートチームの日々の管理や運用のタスクが容易になったと説明している。

この利点に関して、調査対象であった1社は次のようにコメントしている。「我々のインフラストラクチャメンテナンスチームは、その時間をメンテナンスだけのために使うのではなく、Dell Technologies Data Center Utilityを使うことで、どのような進歩や他のサービスを実現できるかを追求しながら積極的に使っています。我々は、こうして、新しい製品の開発を進めており、我々のソリューションとクラウドへの移行に役立つあらゆるタイプのテクノロジーに目を向けています。現在は、ハイブリッドクラウドベースの新規サービスに焦点を合わせています」

Table 3 に示されているように、インタビューを受けた企業は、これらのチームに関しては平均で3%の効率向上を達成しており、これは、スタッフ1人当たり約50時間が、他の活動や取り組みに使えることを意味する。

TABLE 3 ITインフラストラクチャチーム：効率

	DTOD 採用前／未採用	DTOD 採用後	差	Dellで得られる ベネフィット
年間1企業当たりのFTE (Full Time Equivalent)	9.8	9.6	0.3	3%
同等のワークロードについて、 年間1企業当たりのスタッフ時間の価値	98万ドル	95万5,000ドル	2万5,000ドル	3%

Source: IDC, 2020

調査対象企業は、デル テクノロジーズのソリューションを用いたフレキシブルコンサンプションモデルへの移行によるITスタッフの効率向上に加えて、その他の運用効率の向上も確認している。たとえば、適切な規模で利用できることによって、ビジネスオペレーション全体を通して効率的なリソース配分が可能のため、ストレージアレイ運用に必要な電力とスペースを抑制することができる。

IDCの計算では、調査に参加した企業は自社の電力とスペースのコストを平均で12%削減できる。これは、100TB当たり年間500ドル(企業当たり4万5,000ドル)の節約に相当し、前述したように全体として5%の運用効率化に貢献している。

収益と生産性のベネフィット

インタビューを受けた企業は、デル テクノロジーズのストレージ向けフレキシブルコンサンプションモデルへの移行によって、その企業が自社のビジネスに対する制約を克服する上で、どのように役立ったかについても述べている。これらのデル テクノロジーズの顧客にとって、他のIT運用やビジネスの運用を中断することなく、ストレージへのアクセスを継続できることは、新しいビジネスチャンスに取り組み、対応していく上で必須の能力である。

調査に参加したほとんどの企業は、自社のサービスと製品が、多量のデータに依存する業界で競争しているため、ストレージの可用性とパフォーマンスが最重点事項である。そのため、既存のストレージリソースが十分に活用できないことによって、ビジネス機会での優位性維持に必要な俊敏さと拡張性の維持が困難となり、その機会を逃してしまうことがあった。

調査に参加した企業は、デル テクノロジーズのストレージ向けフレキシブルコンサンプションモデルへの移行によって、ビジネス競争に参加し勝ち残るために必要な柔軟性、俊敏性、拡張性がどのように得られたかに関する多数の事例を挙げている。調査に参加した数社の企業は、時間に敏感で、絶えず変化し続ける顧客の需要に対応するために、DTODのバースト機能を活用したと述べている。調査に参加した企業は、DTODを使って、自社の顧客のニーズにどのように上手く対応ができたかについて、事例を紹介している。

- **ストレージのバーストが可能になったことによるビジネスのタイミングパターンの変化：**「Flex On Demand の採用を決めた主な理由は、自社が十分なストレージ容量を持っていないことで入札が困難となるプロジェクトに対し、これを可能にする能力を持ちたいということでした。Flex On Demand のバースト機能を使うことで、以前は6～8週間もかかっていた長いプロセスが、今は管理設定に1時間もかかっていません」
- **クライアントへ従量課金制モデルを提供し、データセンター運用のスケールアップ/ダウンを行う能力：**「1番の利点は、クライアントが求めていた従量課金制モデルを提示できることです。2番目の利点は、厳密なITの視点から、ビジネス要件に対応してデータセンターの運用を調整できることです」
- **計画外のビジネス需要に対応するためのストレージ容量にアクセスできる能力を所有する：**「Flex On Demandは、ストレージの可用性の観点から、俊敏性を高めるのに役立ちました。ビジネス需要に対応するためにストレージの準備はすでにできています」

Table 4は、デル テクノロジーズのストレージ向けフレキシブルコンサンプションモデルを利用することで、調査に参加した企業のビジネスに与える目に見える効果を示している。調査に参加した企業は、ストレージへのオンデマンドアクセスにより、平均で年間362万ドルに相当する収益増があったとしている。これらの企業は、この収益の増加を、より多くのビジネス機会への対応、顧客や見込み客に提供するまでの時間の短縮と結び付けた。また、これらの企業は、サービスプロバイダーとして、あるいは製品／サービスの作成と提供において、ストレージ環境の限界を押し上げて顧客をサポートできると確信している。

TABLE 4 ビジネスオペレーションへの影響：収益

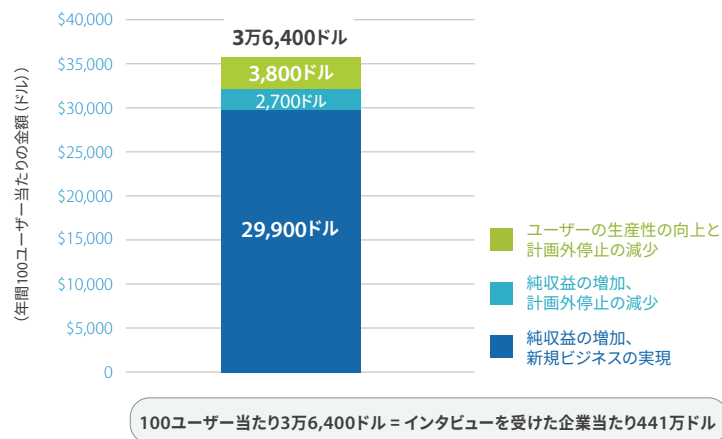
	企業当たり	100ユーザー当たり
ビジネスへの影響 - ビジネス機会へのさらなる取り組みから得られる収益		
年間総収益増	362万ドル	2万9,900ドル
年間総純収益*	54万2,400ドル	4,500ドル

* マージンが15%であると仮定

Source: IDC, 2020

前述したように、ストレージに関してフレキシブルコンサンプションモデルに移行することで、調査対象企業は、ストレージリソースの購入と運用コストを大きく減らすことができた（平均で23%削減）。また、Figure 5では、ストレージの俊敏性、パフォーマンスおよび信頼性が向上したことで企業が手にした重要な価値を示している。IDCでは、インタビュー対象であるデル テクノロジーズの顧客は、収益増とユーザーの生産性という観点で、平均で100ユーザー当たり3万6,400ドル（企業当たり441万ドル）相当のベネフィットが見込めると試算している。（Figure 5を参照）。

FIGURE 5 ビジネスベネフィットと運用ベネフィット

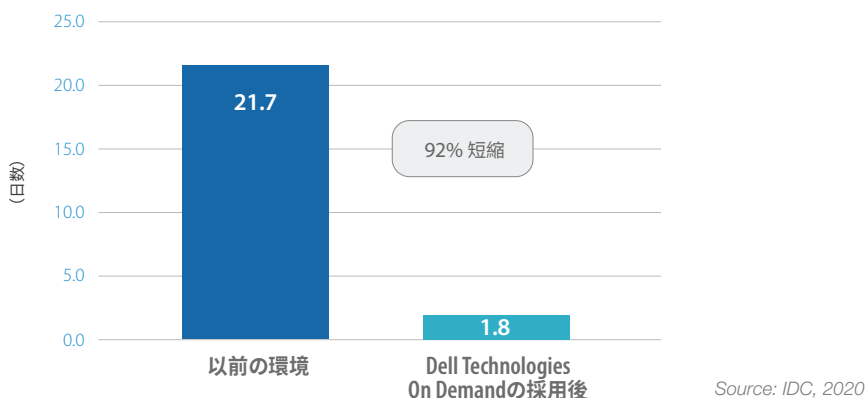


Source: IDC, 2020

ビジネスの俊敏性の改善

完全に新しいストレージ、つまり新しいストレージアレイの配備に必要なサイクルタイムという観点で、デル テクノロジーズのフレキシブルコンサンプションソリューションの採用は調査対象企業に劇的な影響を与えた。企業には、もはや承認、申込み、納入、導入の長い調達サイクルに関わる必要性がなくなり、新しいストレージの立ち上げに要する時間を4週間以上から2日未満に短縮できた。これは、92%の改善になる (Figure 6を参照)。これは、ビジネス需要を満たすストレージの提供に関わる俊敏性が大きく向上しただけでなく、プロビジョニング作業担当のITチームメンバーが必要とした片手間の作業時間を節約できたことを意味している。

FIGURE 6 新しいストレージの導入に要する時間



調査対象企業は、デル テクノロジーズのフレキシブルコンサンプションモデルを活用して、ストレージの信頼性とパフォーマンスを向上させた。これらの企業は、自社のストレージテクノロジーに関連した問題はほとんど挙げてないが、容量が限界に達し、新しい容量が迅速に提供できない場合に生じる課題について述べている。

あるインタビュー対象企業は次のように述べている。「当社のストレージ利用率は92%や93%に達することがしばしばあり、これが問題となっていました。Flex On Demandを使うことで、この利用率を3分の1に下げることができました」

ストレージ容量をビジネスのニーズに確実に一致させることができる結果として、調査対象企業では、ストレージが関係した計画外停止の頻度と影響を最小に抑えることができたことと述べている。これらの企業は、計画外停止の頻度を半分以上も減らすことができ（平均で54%減少）、そのような停止がビジネスオペレーションに及ぼす全体的な影響を64%削減した（Table5を参照）。実際のところ、これは、平均的なユーザーでは停止によって失われていた生産的な時間を年間1時間からわずかに22分に短縮したことを意味している。これはビジネスリスクと潜在的損失がかなり削減されることを表している。

TABLE 5 計画外ダウンタイムの影響

	DTOD 採用前／未採用	DTOD採用後	差	DTOD採用の ベネフィット
年間頻度	2.2	1.0	1.2	54%
生産性喪失時間（年間、1ユーザー当たり）	1.0	0.4	0.7	64%
年間、1企業当たりの生産時間の喪失（FTE）	6.6	2.4	4.2	64%
生産性喪失コスト（年間、1企業当たり）	45万9,900ドル	16万6,300ドル	29万3,600ドル	64%

Source: IDC, 2020

インタビュー対象であるデルテクノロジーズの顧客は、強力なアプリケーション性能を保証できる能力は、フレキシブルコンサンプションモデルの利用によるものであるとしていた。影響を受けるアプリケーションはインタビュー対象企業ごとに異なるが、バックアップ環境とデータリカバリー環境に加えて、顧客対応、設計、視覚効果、データベース、エンタープライズ運用アプリケーションのようなビジネスクリティカルなワークロードが含まれている。パフォーマンスの改善は、ストレージリソースを利用して最適な性能レベルをより迅速に提供できる企業の能力と関連している。調査に参加した企業は、有効なストレージ容量を平均で16%増やしたと報告している。また、フレキシブルコンサンプションモデルへの移行による直接的なベネフィットとしては、ストレージのアップグレードが非常に容易であることを示している。

インタビューを受けたある企業は、次のように述べている。「Dell Flex On Demandを使うことで、パフォーマンスが大幅に改善されました。提案されたストレージの中で最速のストレージを手に入れることができ、その上、これまではサイズを基準にしてストレージを購入してきましたが、Dell Flex On Demandを使うとこれまでのコストの何分の一かで済んでいます」

この種のパフォーマンスに関連したベネフィットは、企業に特有であり定量化は困難であるが、顧客と従業員へ最高品質レベルのパフォーマンスのアプリケーションとサービスを届けようとしている企業にとっては重要なベネフィットである。

課題／機会

デル テクノロジーズが抱える課題は、ほとんどのクラウドやインフラストラクチャのプロバイダーと同様に、しばしば異なる視点を持つさまざまな利害関係者に対し明確な価値提案を行うことである。マルチクラウドの世界で利用可能なさまざまな運用モデルの利点を、プライベートクラウド、パブリッククラウド、リモートエッジロケーションにおいて明確に位置づけていくことが重要である。

ユーザー企業との会話の中でフレキシブルコンサンプションモデルに言及すると、問題はいつそう複雑になる。フレキシブルコンサンプションモデルが提供する独特な機会と利点を伝え、IT、財務、調達または製品のグループのリーダーとコンセンサスを構築することは、困難な課題である。これらの課題を克服するには、さまざまな利害関係者の重要な目的に対処するためにストレージ容量、電力、サービス、コストの主要な指標に焦点を合わせることが重要である。これらの指標が、企業の戦略的ビジネスニーズの推進をどのように可能にするかを示すことは、コンセンサスを構築する上で重要である。

あらゆる新しい取り組みと同様に、これらの取り組みは、断片化またはサイロ化された組織構造のために、失敗に終わる可能性がある。これらの多様な運用モデルと従量課金制ソリューションの双方の採用を推進するためには、企業内を歩き回り、主要な利害関係者間で合意を取り付ける能力が必須である。

IDCでは、密接な相互関係を持つハイブリッドクラウド運用モデルとフレキシブルコンサンプションモデルの双方の採用を推進するために、デル テクノロジーズが、その販売部隊、パートナーおよび顧客の教育とトレーニングへの投資を続けることを推奨する。これらのモデルの採用が加速すると共に、デル テクノロジーズは、その直販部隊とそのパートナー内に専門家集団 (Center of Expertise) を設立するために主要な知見と専門知識を活用すべきである。専門家集団は、学習曲線とセールスサイクルを短縮するための指標、販売ツール、トレーニング資料を提供する。これらのソリューションを迅速に提案、テストおよびスケールアップするツールの提供は、ソリューションの市場導入を加速する鍵となる。

Dell Technologies On Demandのビジネスチャンスは大きい。IDCでは、顧客がテクノロジーを所有せずに利用し、必要に応じてストレージ容量をスケールアップまたはダウンする機会を受け入れるにつれて、フレキシブルコンサンプションソリューションの採用が加速すると考えている。実際に、IDCでは、2024年までに、データセンターインフラストラクチャの半分以上がas-a-Serviceモデルとして使われ運用されると予測している。顧客は、今日の競争が激しいビジネス環境で勝ち残るために必要な俊敏性とコストの予測性を得るために、この「as-a-Serviceモデル」を採用することが背景である。

IDCは、メッセージを統合し、すべてのフレキシブルコンサンプションとas-a-Serviceのソリューションを一つの傘の下でその一貫性を推進することによって、デル テクノロジーズが最も重大な課題の一つに対処し、自社内の製品グループのサイロを排除して全体的な複雑さを軽減できると考える。一貫したアプローチとシンプルな提案でこの問題に対処することで、デル テクノロジーズは販売プロセスを改善し、パートナープログラムを強化し、顧客の混乱を軽減できる。

顧客である企業は、今日の競争が激しいビジネス環境で勝ち残るために必要な俊敏性とコストの予測性確保のために、as-a-Serviceモデルを採用するようになり、2024年までに、データセンターインフラストラクチャの半分以上がas-a-Serviceモデルとして使われ運用されるとIDCでは予測している。

このビジネスバリューに関する調査が強調しているように、Dell Technologies On Demandソリューションは、企業に、コストと使用の整合を取る能力と変化する需要に対応する柔軟性を提供している。これらのモデルを促進要因に注意を払い、販売部隊とパートナーの教育への投資を継続的に行うことで、この急成長分野におけるデルテクノロジーズの成功を確実なものとするであろう。

結論

コンサンプション、すなわち使用量をベースとし、as-a-Serviceモデルを採用することで、組織のITインフラストラクチャのパフォーマンス、効率、可用性、スケーラビリティ、および管理されたユーティリティがビジネスの要求に適合し、より予測可能な結果がもたらされる。これらの新しいテクノロジーコンサンプションモデルは、非効率性を排除し、重要なイニシアティブのために時間、資金、リソースを解放する。

2016年以来、IDCはコンサンプションベースのas-a-Serviceモデルの促進要因とその影響を調査している。そのデータからも明らかなように、このモデルのシンプルさ、柔軟性、透明性によってIT資産に対する投資と維持の複雑さが軽減され、運用コストが削減され、さらにITスタッフのワークロードが軽減されることに企業は気づいている。

このモデルを利用することで、企業は、成功に必要な俊敏性とスピードを持って急速に変化するビジネスダイナミクスに対応できる。結局のところ、今日の流動的なビジネス環境で成功するには、迅速なイノベーションが必要であり、迅速なイノベーションを実現するためには拡大する需要に対応できる俊敏なITアーキテクチャとフレキシブルコンサンプションモデルが必要である。

IDCの調査では、運用コストの削減と主要なビジネスイニシアティブのサポートに関して、企業がDell Technologies On Demandソリューションで実現できる主要な価値を示している。デルテクノロジーズのストレージのフレキシブルコンサンプションモデルへ移行することで、調査に参加した企業は、ストレージ関連の年間コストを23%削減できたのみならず、ストレージ容量の需要に対応し、全体的な俊敏性を向上させる自社の能力も改善できている。

データを通じて自社の価値を差別化する新しい方法を見つける必要がある競争の激しい市場で事業を展開している企業にとって、コンサンプションベースのas-a-Serviceテクノロジーソリューションは、競争力が次第に高まるという重要な利点を提供できる。

補遺

調査方法

本プロジェクトにおいてはIDCの標準的なビジネスバリューに関する調査方法が使用されている。本調査方法は、インフラストラクチャ向けの Dell Technologies On Demand ソリューション、つまり Dell Technologies Flex On Demand サービスと Data Center Utility サービスを基盤として現在使用中のユーザーから収集したデータに基づいている。これらのソリューションを使用している企業とのインタビューに基づいて、IDCは、以下のようにしてベネフィットとコストを計算した。

- インタビュー中に、Dell Technologies On Demand ソリューション使用前後の影響評価を利用して定量的なベネフィット情報を収集する（本調査では、ストレージおよびITに関連したコスト削減、スタッフの時間の節約、生産性向上、収益増がベネフィットに含まれる）。
- インタビューに基づいて、Dell Technologies On Demand ソリューション利用の年間コストとこのソリューションの導入に関連するコストを含む完全な投資プロファイルを作成する。

IDCは、以下の仮定をベースにして財務分析を行っている。

- 効率化とマネージャーの生産性によるコスト削減を定量化するに当たり、時間の価値に会社負担の給与（給与に福利厚生および諸経費として28%を加算）を乗じて計算する。こうした分析を行うに当たり、IDCは、ITスタッフメンバーの会社負担の平均的な給与を年間10万ドル、非ITスタッフメンバーの会社負担の平均的な給与を年間7万ドルというIDCの標準給与の想定額を使用している。

IDC Note: 本調査レポートに含まれる数値は、四捨五入などの影響によって、合計値が一致しない場合がある。

IDC Research, Inc.

5 Speen Street
Framingham, MA 01701
USA
508.872.8200
Twitter: @IDC
idc-insights-community.com
www.idc.com

Copyright Notice

External Publication of IDC Information and Data — Any IDC information that is to be used in advertising, press releases, or promotional materials requires prior written approval from the appropriate IDC Vice President or Country Manager. A draft of the proposed document should accompany any such request. IDC reserves the right to deny approval of external usage for any reason.

Copyright 2020 IDC.
Reproduction without written permission is completely forbidden.

IDC社 概要

International Data Corporation (IDC) は、ITおよび通信分野に関する調査・分析、アドバイザーサービス、イベントを提供するグローバル企業です。50年にわたり、IDCは、世界中の企業経営者、IT専門家、機関投資家に、テクノロジー導入や経営戦略策定などの意思決定を行う上で不可欠な、客観的な情報やコンサルティングを提供してきました。現在、110か国以上を対象として、1,100人を超えるアナリストが、世界規模、地域別、国別での市場動向の調査・分析および市場予測を行っています。IDCは世界をリードするテクノロジーメディア（出版）、調査会社、イベントを擁するIDG（インターナショナル・データ・グループ）の系列会社です。

